



<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.48 / Fall 2022

会 長 滝浦 真人

事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学 秦かおり研究室内

事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行口座 記号・番号:00900 - 130378 日本語用論学会

支店番号:099(店名:〇九九) 当座預金 口座番号:0130378 日本語用論学会

《副会長新任ご挨拶》

堀江 薫 (名古屋大学)

日本語用論学会会員のみなさま

この度副会長に就任しました名古屋大学の堀江と申します。言語類型論の観点から文法と語用論のインターフェイス的な現象を解明することに関心を持っております。これまで評議員(運営委員)を継続して務めさせていただきましたが、この度は副会長ということで責任の重みを一層実感しております。

私は本学会に関して比較的 latecomer だと思っておりますが、入会当初より現在に至るまで、本学会から多くの学問的な刺激を受けております。同時に、本学会は、多くの人との出会いの場として、とても居心地のよい学会であると感じております。これも本学会の創設、発展に尽力されてきた諸先輩方のご努力の賜物と思っております。

私自身複数の学会で年会費を納めて学会誌を購読し、大会に参加する機会を得ておりますが、その中には会員数が多く、長い歴史のある「大学会」もあれば、比較的規模が小さく、特定の学問分野に特化した本学会のような「中学会」もあります。

本学会の重要な役割の一つは、語用論に関心を持つ研究者の方々が集える niche を提供し、よりよい研究発信の場を提供することだと考えます。その目的のために、滝浦会長がイニシアチブを取られ、現在学会として実現に向けて動いている事業の一つにジャーナルのオンライン化が

あります。これは学会の国際発信力・速報性の強化のみならず財政基盤の健全化にも大きく貢献できるものと考えます。オンラインジャーナルを軌道に乗せることを私の任期中の大切なミッションの一つとして取り組ませていただきます。どうぞよろしくご挨拶申し上げます。

(堀江 薫)

PSJ と語用論の発展のために

山岡 政紀 (創価大学)

本年 4 月より副会長の大任を拝しました。日本語用論学会 PSJ 発展のため、語用論の発展のために微力を尽くして参る所存ですので、よろしくご挨拶いたします。

私は 2013 年に加藤重広先生からお声かけいただき、滝浦真人先生と同時期に PSJ の運営委員となりました。以前に加藤先生の著書の書評を月刊誌に寄稿し、加藤先生もある機会に拙著への感想を寄せてくださり、PSJ を通じての研究交流の有り難さを実感しておりましたので、ご恩返しするつもりで役員をお受けしました。

その後、2016 年に加藤先生が会長に就任されたのは PSJ にとって転換期でもありました。1998 年の学会創設以来、関西の歴代会長のもと関西を中心に運営されてきた PSJ が実質的な全国展開となり、かつ、中心者の世代が一気に若返ったのでした。「お笑い第七世代」という言葉があるそうですが、加藤先生を中心とする私たちの世

代はいわば「語用論第二世代」とでも言えましょうか。

言語学の諸部門のなかで新参者である語用論の日本における地位を確立すべく、加藤会長はPSJの顔、語用論の顔として精力的に旗振り役を務められました。2020年に加藤会長から引き継がれた滝浦会長はPSJの財政問題にメスを入れ、評議員制度を確立し、そして学会誌『語用論研究』のあり方も改革されようとしています。PSJの学会組織の基盤構築と日本の語用論の発展とは不可分であり、その先頭に立つ滝浦会長をお支えし、構想実現の一翼を担うことは「語用論第二世代」の末席を汚す者の責務であると自覚しております。

折しも『日本語学』2022年秋号（明治書院）が特集「日本語の語用論」を組みました。執筆陣はさながら「語用論第二世代」の競演となりました。それは、PSJを通して切磋琢磨してきた我々世代の研究の精華でもあり、多様な語用論観の共存と拡がりが見られた未来志向の興味深い特集となりました。拙論も収めていただきましたが、8ページ以内という制限を律儀に厳守しました（笑）ので、この場を借りて少々補足させていただきます。

言語学史的に見ると語用論の出現は20世紀半ばには統語論・構文論（以下、文法論）にやむなく生じる理論上の不完全部分を補完する形で既に登場しており、文法論に従属する主従関係の従の位置から出発しています。そうした語用論に自立した地位を与えることに大きく貢献したのがリーチでした^(*)。彼は言語哲学の理論であったグライスの協調の原理を語用論の理論として取り込み、自らポライトネスの原理等を加えて語用論の原理群として示しました。これによって文法論と語用論とは対象を異にする別部門として対等な地位が与えられることになりました。即ち、文法論は言語の静的な構造・意味を考察対象とするのに対し、語用論は異なる主観間のコミュニケーションにおける言語の動的な機能・意味を考察対象とする別部門である、と。

もっともその段階に至ってもなお文法論の側がその補完のために語用論を利用することは依然として可能ですし、それは語用論から文法論への貢献とも言えます。ひょっとして『日本語学』が私に与えたお題「日本語の文法と語用論」はそういうことが期待されていたのかもしれませんが。しかし、私はあくまでも自立した語用論の側から両者の対等な関係を意識しつつ執筆することを考えました。

そこで掲げた副題は「モダリティから発話機能へ」。日本語の文法論において対人的モダリ

ティ（寺村）、発話・伝達のモダリティ（仁田）等の名称で範疇化されてきた「対人志向モダリティ」は本来、語用論の考察対象であり、発話機能という語用論の枠組みで論じるべきことの妥当性・合理性を主張しました。

発話機能はもともと会話分析や言語教育学で用いられていた用語ですが、語用論としては発話行為論の応用でもあります。サールの発話行為論は適切性条件のなかに準備条件を採り入れたことで、言語哲学の領域から言語学・語用論の領域に入る要因となりましたが、それを応用して語用論的条件とし、ハリデーの機能文法と組み合わせると純然たる会話理論に模様替えをしたのがここで用いている発話機能論に当たります。勝手ながら拙論の補足をさせていただきましたが、加藤先生、滝浦先生をはじめとする皆様の諸論考はまさに日本の語用論の最新の現在地図を日本語学関係者に広く示すものであり、一読者としても学ぶところが多く感謝しています。

今後、PSJ自身の取り組みとして語用論のあり方をさらに活発に討議しながら、言語学界や人文科学領域全般に向けて語用論の存在をアピールし、良き研究を生み出す基盤を創り、滝浦会長と共に今この時を駆け抜けて、次に続く「語用論第三世代」へとバトンを渡していけたらと願っています。

* Leech, G (1983) Principles of Pragmatics. London: Longman

(山岡 政紀)

語用論研究の新潮流 (7)

「スタンスと響鳴の 観光コミュニケーションへの応用」

高梨博子（日本女子大学）

(高梨 博子)

新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活やコミュニケーションに多大なる影響をもたらした。行動様式が多様化する中で、「人や社会とのつながり」の大切さ、幸福感 (well-being) や持続可能性などの価値観を私たちに再認識させた。人をつなぐ言語使用の実態を探る語用論に携わる研究者として、言語形式とその意味づけ、コンテキストの重要性をあらためて感じている。語用論における意味のコンテキスト依存性は、ダイクシス、あるいは真逆の意味になるアイロニーからも明らかである。さらには、メタコミュニ

ニケーションに見られるように、同じ言語表現であっても本気で言われているのか、ふざけて言われているのか、あるいは本気のメッセージがトーンダウンされているのか、などについて推論しなければならぬ場合もある。微妙なニュアンスの違いも考慮すれば、コンテキストに依拠した言語使用と意味解釈の範囲は無限に広がり、その全容を把握することはほとんど不可能だ。しかし、言葉を用いてコミュニケーションをとる現場の当事者たちは、マルチモーダルな記号資源、それらが指標する物理的環境や心理的状态、参与者たちの社会的関係性や共有する経験、共通認識や慣習といった文化的背景の総体から成るコンテキスト情報を活用することによって言語相互行為を遂行している。研究者もまた、コンテキストを考慮することにより、言語機能や発話行為、言葉のやりとりから生まれる社会文化的価値などの分析を深めることができる。これらは、ポストコロナ時代において世界との交流が増大する中、異文化間交流や相互理解を深めていく上で欠かせない要素となっていく。

コンテキストは決して固定的あるいは背景的なものではなく、コミュニケーションの現場で創発し再生産されるという可変性をもつ。個々の言語相互行為のコンテキストは、ある特定の時空間における、ある特定の話者たちによって展開する唯一無二の現象だからである。この意味において、相互行為の参与者たちは、コンテキストを構築するエージェントとして、最も重要なコンテキスト構成要素である。リニアに変容を遂げていくコンテキストの特徴をよく表すものとして、ガンパーズの「コンテキスト化の合図」の概念は、「メタコミュニケーション」及び「フレーム」の概念とあいまって、話し手たちが目下携わっている相互行為をどのような性質のものとして認識しているのか、またそれはどのような記号形式で合図され、協働で構築されるのか、という会話のフレーミング研究を推進した。

コンテキストのフレーミングには「スタンステーキング」という行為が伴うと私は考える。スタンスについては、一般には主観性を表す評価行為と言われているが、デュボワのスタンストライアングルのモデルにより、極めて対話的かつ間主観的な認知・社会文化的行為であることが強調されている。スタンステーキングがもつ対話性(dialogicality)は、パフチンやヴォロシノフの「対話」の考えを基底とする—すなわち、2つの主体による共通の客体に対するスタンスが相交わることにより、これまで個々がもっていた以上の新しい価値が創出される。このようにス

タンステーキングは、感情や認識のスタンスをとる主体が実際に身を置く社会指標的なフィールドとしてのコンテキストに依拠しつつ、再生産され続ける自己と他者(あるいは、あるヴォイスと別のヴォイス)との関係性の上に成り立っている。このことから、デュボワは先導スタンス(stance lead)と追随スタンス(stance follow)から成るスタンスのペア(stance pair)が、コミュニケーションの最小単位であると述べている。そして、このスタンス間の関係性は、具体的には「響鳴(resonance)」として、言語形式を主としたさまざまな記号形式により表出される。響鳴は、パフチンの唱える「クロノトポス」の考えとあいまって、時空間的視座において、絶え間なき創造過程の解明に資するものとなる。

スタンスや響鳴は、これからの言語学とその関連分野において高い汎用性を有している。文法を開かれた記号システムと捉える文法研究においては、先行発話に誘発されて現行発話の構造や形式が創発し、その言語機能や意味解釈は2つの発話間の関係性により同定される。このことは、新奇あるいは既存の言語形式が獲得する新しい機能を解明する手がかりを与えてくれる。これについては、響鳴を主要な関連概念とする対話統語論(dialogic syntax)の活用が有効であると思われる。また、これに関連して、言語習得のプロセスに光を当てることもできる一方で、先行発話をもとにしながら、そこから逸脱する「遊び心」やユーモアの研究にも寄与することができる。こうした遊びの要素に関しては、先行発話だけでなく、共通の知識や経験としての先行テキスト(例えばパロディの場合、参照されるオリジナル)の認識も必要となるため、対話性や間主観性のほか、間テキスト性も関わってくる。さらには、より持続的な社会文化的コンテキストや歴史性を重視する語用論の応用分野においては、個々の場面におけるスタンス行為が繰り返されることによって、パフォーマンスが詩的に構造化され、ある言語コミュニティにおいて慣習化されることを示すこともできる。「プल्लीモーダル」は、この意味において「マルチモーダル」を越えて時空間の重なりから形成される社会文化的価値体系とその実践を示唆するものであり、響鳴の観点からは、デュボワが「響鳴サイクル(resonance cycle)」と呼ぶものの帰結とも言えよう。私はこの点において、近年、スタンスと響鳴を観光のディスコースへ応用することを試みている。世界の観光都市をフィールドとして、英語を使用言語とするウォーキングツアーを参与観察し、ガイドと観光者間の相互行為に見られるスタンス表出を通して、観光地の

観光資源やアイデンティティについてのイデオロギーが対話的に形成される異文化理解のプロセスを研究している。響鳴は、並行する2つのスタンス表出發話間の類似性だけでなく、差異も際立たせる。そのため、ガイドと旅行者がスタンスを相互に寄せて共感するだけでなく、対話的交渉のプロセスの中で、互いのスタンスや、各自が属する文化の相違や多様性を再認識するほか、相手に触発されて新たなスタンスが創発することも多く見られる。世界の様々な観光都市におけるフィールドワークで、世界中から訪れる多くの人々と出会い、観光を通じた交流を楽しむ姿や素朴な人柄、心の機微に接することができるのは、この研究の醍醐味である。都市の観光資源やアイデンティティにはステレオタイプが前提となるものの、観光の対話のコンテクストにおける動的な意味づけや価値創造の研究を通じて、世界の人々の笑顔の回復に寄与できればと願っている。

参考文献

- Bakhtin, Mikhail M. (1981) *The Dialogic Imagination: Four Essays*, ed. by Michael Holquist, trans. by Caryl Emerson and Michael Holquist. Austin, TX: The University of Texas Press.
- Du Bois, John W. (2007) *The stance triangle. In Stancetaking in Discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*, ed. by Robert Englebretson, 139-182. Amsterdam: John Benjamins.
- Du Bois, John W. (2014) *Towards a dialogic syntax. Cognitive Linguistics* 25(3): 359-410.
- Gumperz, John J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 内閣府 (2020, 2022) *新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査(第1回、第5回)*
- Silverstein, Michael and Greg Urban. (eds.) (1996) *Natural Histories of Discourse*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Takanashi, Hiroko. (2022) *Emergent stance in walking tour discourse in Nara: The intersubjective construction of interculturality. In Intercultural Communication in Tourism: Critical Perspectives*, ed. by Bal Krishna Sharma and Shuang Gao, 206-234. New York: Routledge.
- Voloshinov, Valentin N. (1973) *Marxism and the Philosophy of Language*, trans. by Ladislav Matejka and Irwin R. Titunik. Cambridge, MA: Harvard University Press.

(高梨 博子)

* * PSJ25 (第25回大会) ご案内 * *

2022年度の第25回大会は、「Zoom オンライン〈リアルタイム方式〉」と「対面方式」を組み合わせで開催いたします。今回も、多くの会員の皆様から研究発表のご応募をいただき、口頭発表35件が採択となりました。詳細は、会員メンバーリスト、学会ウェブサイトにて随時お知らせいたします。

◆日程と会場：

- ・2022年11月26日(土)
研究発表・総会
Zoom オンライン〈リアルタイム方式〉のみ
- ・2022年11月27日(日)
基調講演・記念シンポジウム・語用論茶寮
Zoom オンライン〈リアルタイム方式〉／対面方式(京都大学吉田キャンパス)

※大会に参加するには、事前申込が必須となります。詳細は学会ウェブサイト・MLでお知らせしますが、期間内に事前登録(一般会員は参加費納入を含む)をお願いいたします。※大会2日目は、オンラインでも、京都大学の会場でもご参加いただくことができます。対面方式での参加を希望される方は、事前申込時にその旨お知らせください。

◆参加費(事前登録)：一般会員1,000円 学生会員無料 非会員は一般・学生とも1,000円

※大会参加手続きをした方に Zoom 情報をお知らせいたします。
※参加費の当日申込はできません。

◆大会テーマ
「語用論研究の温故知新」

◆主なプログラム(予定)

《11月26日(土) オンライン》
午前：研究発表①
午後：研究発表②・総会

《11月27日(日) ハイブリッド》
午前：基調講演1・基調講演2
午後：25周年記念シンポジウム・語用論茶寮

【基調講演1】

CHEN Xinren (Nanjing University)
“Translanguaging impoliteness/incivility in Chinese

netizens' commentaries”

【基調講演 2】

山梨正明（京都大学名誉教授・関西外国語大学）「認知語用論の研究プログラム—新たな展開に向けて」

【25周年記念シンポジウム】

テーマ：

人と AI とメディアを紡ぐ語用論の新展開

趣旨：

25周年記念となる本シンポジウムでは、AIとの対話システム、日常会話コーパス、打ちことばといった新たな研究課題・言語資源・言語メディアの観点から、伝統的な語用論研究に揺さぶりをかけることを目指す。具体的には、人間同士の対話では暗黙の裡にできてしまうため等閑視されがちな対話メカニズムに対する新たな視点、多様な日常会話場面を網羅的に扱うことのできる新たな言語資源である会話コーパスがもたらす語用論研究の可能性、さらには若者にとって馴染み深い言語環境であるソーシャルメディアから生まれた「打ちことば」が新たにもたらした言語変化、といった最新の研究動向を紹介し、フロアとの活発な議論を通じて、新時代の語用論研究を展望したい。

3. 司会・登壇者

司会：岡本雅史（立命館大学）

発表者：東中竜一郎（名古屋大学）

小磯花絵（国立国語研究所）

三宅和子（東洋大学）

4. 発表内容（話題）

[発表1] 対話システムが与える語用論研究の新たな視点 東中竜一郎

[発表2] 日常会話コーパスがもたらす語用論研究の可能性 小磯花絵

[発表3] モバイル時代の語用論—「打ちことば」は何を変えたか 三宅和子

【口頭発表（11/26）の実施方法】

リアルタイム方式（発表・質疑ともライブ）

発表者は口頭発表（25分）と質疑応答（10分）を、大会当日に Zoom にて行います。画面共有で資料が提示されます。

【発表賞について】

例年の通常開催と同様、口頭発表において事前に発表賞の審査を受けることを申告している発表者が対象となります。

◆No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず大会総務委員会に断りなく、大会当日に Zoom 会場に入室せず、発表及び質疑応答を行わない発表者は、「No Show」とみなし、学会ホームページにて公表します。ただし、事前、または、当日に（やむをえない場合には事後に）、発表を行えない（行えなかった）合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆第 25 回大会会場・京都大学への交通・宿泊について

【対面会場について】

会場：〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学吉田キャンパス（吉田南構内）
国際高等教育院棟（キャンパスマップ 87 番）



最寄駅・所要時間：京阪出町柳駅・徒歩 15 分

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus#yoshida>

【交通について】

★京都大学吉田南キャンパスは、JR 京都駅前バスターミナル（D2 のりば）から京都市営バス 206 号系統（東山通經由北大路バスターミナル行き）、または JR 京都駅八条口バス乗り場（E1）から循環路線バス（フープ）にご乗車いただき、京大正門前または京都大学前にて下車ください（所要時間約 30 分、交通事情により市バスは 1 時間ほどかかることもあります）。各バスの乗り場は以下のリンクをご覧ください。

★なお、JR 京都駅からの交通事情の影響を受けにくいルートは、京都市営地下鉄（烏丸線）国際会館方面にご乗車いただき、今出川駅（K06）にて下車した後、烏丸今出川バス停から京都市営バス 201 号系統（東山通經由百万遍・祇園行き）に乗り継ぎいただくものとなっています。

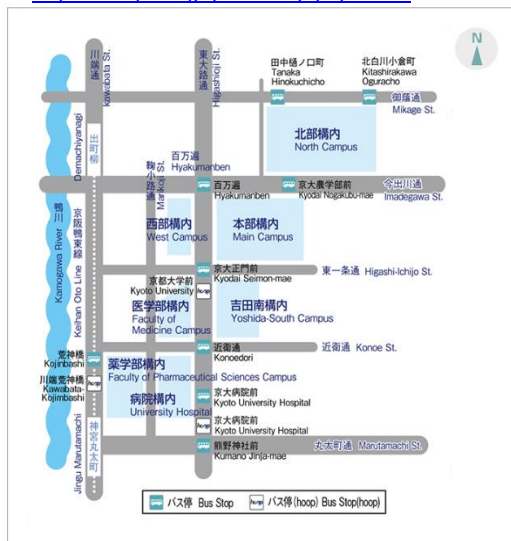
★JR 京都駅は東京駅から新幹線で2時間15分です。

・京都市営バス：

https://www2.city.kyoto.lg.jp/kotsu/webguide/ja/bus/busstop_bunsetu.html

・循環路線バス：

<https://hoopbus.jp/place/stop.php?no=1>



[宿泊について]

京都市街中心地(四条烏丸)周辺の宿泊が便利です。四条烏丸からは京都市営バス 201号系統(東山通經由出町柳行き)で移動できます。京都市内にはビジネスホテル、観光ホテル等が多数ありますが、感染状況が落ち着いている場合、観光等で満室になる可能性が高いため、宿泊のご予約は各自にてお早めをお願いします。

場合によっては大阪府や滋賀県のホテルでもJR 京都線・琵琶湖線の沿線なら比較的短時間でご来場になれます。交通機関を確認のうえ、ご利用ください。

＊ ＊ 研究会コーナー ＊ ＊

◆メタファー研究会

メタファー研究会のメンバーが登壇するワークショップが、下記要領で開催されました。ワークショップの詳細内容や予稿等は、日本語学会の大会サイト (<https://www.jpling.gr.jp/taikai/2022b/>) をご参照ください。

日本語学会 2022 年度秋季大会
「ワークショップ 0 (ゼロ)」

テーマ：水のメタファーについて多角的な観点からとらえる

日時：2022 年 10 月 30 日 (日) 9:30～11:00

※Zoom によるオンライン開催。

登壇者：

鍋島弘治朗 (関西大学)
大堀壽夫 (慶應義塾大学)
多門靖容 (愛知学院大学)
近藤泰弘 (青山学院大学)

司会：

大田垣仁 (近畿大学)

・研究会での発表にもとづく論文を収録した『メタファー研究』第3号(ひつじ書房)の編集が進行中です。充実した内容でお届けしますので、もうしばらくお待ちください。

・今後の研究会イベントについては、研究会 Web サイト (<https://sites.google.com/site/metaphorstudy/>) で随時告知します。

(杉本 巧)

＊ ＊ 委員会・事務局より ＊ ＊

★学会誌編集委員会より

—チョムスキーでさえ落とされたらしい—

『語用論研究 (S/P)』24号には、多くの投稿をありがとうございました。先般、9月11日に2022年度第2回編集委員会を開催しました。5月31日に締め切りました S/P24へは、投稿論文が12本(うち、研究ノート1本)あり、何本かの修正後の再審査を含めて、2023年3月の刊行を目指し、現在鋭意編集中です。このほかに、昨年度大会の特別講演、招待論文、書評がありますので、お待ちいただければと思います。なお、前号の Newsletter でも会長からお知らせがありましたように、来年度から、S/Pはオンライン化へと舵を切るべく、現在ワーキンググループを立ち上げ、議論を進めています。よって、紙媒体としての、開拓社からの刊行は、この24号で最終となります。詳細は、追ってご連絡を差し上げますので、メイリングリストその他でのお知らせになりますので、もう少しお待ち下さい。なお、長年御世話になって参りました開拓社様へは、24号の編集後記で、再度、編集委員会より、謝辞とこれまでの歴史も含めて書く予定にしております。学会サイトをご覧になるとお分かりかと思いますが、開拓社からの刊行は、第10号(2008年度)からお願いしました。それまでは、いわゆるコピー印刷でして、学会誌の体裁と質を上げる目的で、当時の会長と編集委員長(編集委員会)で

決定されました。その後十数年にわたり、開拓社様には、大変お世話になりました。この場を借りまして、これまでの編集委員長（編集委員会）を代表して、お礼を述べたさせていただきたいと思います。

さて、このお知らせの副題（一チョムスキーでさえ落とされたいらしい）に驚かれた方も多いと思います。紙ベースでの刊行が最後になるに当たって、ノスタルジアに浸ろうと言うつもりでもなく、今後のS/Pへの投稿に多少の「檄」を飛ばせたらと思いついて書いています。私が、大学院生の頃だったか、その後だったかは忘れましたが（1970年代後半か1980年代初頭）、チョムスキーがどこかの雑誌の査読に落とされたいらしい、という風聞がまことしやかに流れてきたことがあります。もちろん、その真偽は不明です。ですから、チョムスキー氏、その関係の方々に云々というつもりはありません、その点、ご了解下さい。いわば、今で言う都市伝説の類いだと思います。この「チョムスキーでさえ・・・」の意味合いには、2つあります。一つは、査読者側がチョムスキーの独自性、天才さを全く理解することがなく（当然、査読は名前を隠しアノニマスでなされたという前提です）、落としてしまったという意味、もう一つは、チョムスキーともあろう人が大ボカをしてしまい、「弘法も筆の誤り」を犯してしまったという意味、の2つです。この風聞が流れてきた頃は、おそらくは前者の意味合いだったと思います。若かった私たちは、査読した人はバカだな、もったいないのに、くらいの感想しか持ちませんでした。ここで問題にしたいのは、チョムスキーに限らず、ある言説の「独自性」、「新規性」ひいては「天才さ」なのです。

学会の査読をするに当たって、どの学会でも、様々な査読基準を、公にあるいは内々に定めています。その中に、その論文に「新規性はあるか」という項目はどの学会でも設けています。自戒を込めて言いますと、それは私たちが一番苦手とするところ。残念ながら、私たちは小学校以来、そんなことはほとんど言われたことはないのです。「論文の書き方」に類する書籍は、山ほど出ています。ところが、そうした「新規性」を身につけるノウハウというものは書いていないどころか、存在しないのではないかとすら思います。むしろ、そんな本は読まないに越したことはないのです。

ただし、学会側としては仕方がないのですが、スタイルシートをよく読んでくれ、よく見てもらってから出してくれ、研究倫理に従ってくれと言う、ある意味「文句」はよくつけます。その中には、過去の論文を読んでないとか、論が掘り

下げれていないとかという批判も含まれます。評価する側から言えば、実はこれらは、案外評価がしやすいのです。ところが、「新規性」「独自性」は非常に評価が難しいところなのです。

では、「新規性がある」「独自性がある」という学会側からの要求は何を求めているのでしょうか。実は、（書き手である）投稿者が100人いればいい、また（読者である）査読者が100人いたらいい、100通りずつあるような気がしています。確かに人文系の学問は積み重ねですし、新しいと思っていたことが誰かが言っていたりすることはよくあります。しかし、そうした重複は注意すれば（すなわち文献を読み込んでいけば）避けられますし、オリジナリティーの端緒となる、従来の知見から解放された自由な発想はどこにでもあるのではないのでしょうか。例えば、（場面も趣旨も違う政治的な講演ですが）チョムスキーは「権威に頼らない」姿勢を求めています。福井直樹氏の報告によれば、次のように「自分で決めなければならない」と発言しています。

「[チョムスキー氏は]数年前に日本で講演をしたときも、『沖縄や福島原発の問題に関して私たちは何をすればいいのでしょうか』という若い聴衆の度重なる質問に、『アドバイスを求めているのは権威を求めることです。権威を求めているはいけません。何をするかはあなたの方が自分で決めるべきことです。ただ、我々が享受している自由も、決して当たり前のもではなく、多くの人たちの血のにじむような努力の結果得られたものであることを忘れてはいけません』と答え、『指導』めいた発言はしなかった。」

<https://www.vogue.co.jp/change/article/innovative-senior-noam-chomsky>

私は、編集委員をやってもう数年になります。それ以前にも、本学会の事務や編集のお手伝いをやっていました。投稿論文は、よく読ませていただきましたし、その都度勉強になるなと思ってきました。本学会でも、他学会でも、お若いときに論文を投稿され、あれよあれよという間に、またまばゆいばかりに、学会の中核になられた方もいらっしゃいます。そういう方の論文は、何か「光る」ものがあつたのだな、と思うことしきりです。ただし、もちろん、自戒も込めてですが、大げさに言えば、チョムスキーを超える、グライスを超える、その時代の寵児になるといった論文の書き手にはなかなか出会えません。翻って、我が国がずっとお手本にしてきたアメリカやイギリスではどうでしょうか。我が国との違いはどこにあるのでしょうか。

本学会は今年の大会で、25周年を迎えます。ほぼ日本語だけでやってきており、残念ながら

海外にもあまり影響を与えることはないですが、25年もの歴史があるので、その中からでも、私たち編集側をうならせるような、査読に困るような、また時代の先駆けとなるような論文が出てきてもいいのではないかと思います。歴史というのは面白いもので、過去を遡らせるだけではなく、今、現在の時代を新しく押し出してくれるような働きがあるように思います。編集委員会としましては、ここに書きましたように、「独自性の強い」、「アクの強い」論文が出てくることを十分歓迎しています。

(文責：編集委員長・田中 廣明)

★大会総務委員会プロシーディングス担当より

日本語用論学会では、2005年度第8回大会より『大会発表論文集』(Proceedings)を発行しておりますが、2022年度第24回大会の論文集(第17号)は、本年6月に学会のホームページで公開されました。

以下、掲載された論文数をご報告いたします。
シンポジウム発表/シンポジウム(日本語)5本
研究発表(日本語)18本
研究発表(英語)3本
ワークショップ発表(日本語)4本
ワークショップ発表(英語)該当なし
ポスター発表(日本語)1本
ポスター発表(英語)該当なし

合計で31本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

(村田 和代)

《事務局より》

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円です。よろしくお願い申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステー

タス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj-at-outreach.jp

★令和3年以降の激甚災害ならびに新型コロナウイルスによる影響を受けられた皆様へ

日本語用論学会では、激甚災害に指定された豪雨の被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2022年度会費」ならびに「2022年度年次大会の参加費」を免除いたします。被災された皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

日本語用論学会事務局

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町1-8

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻
秦かおり研究室内

E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp

(事務局長・秦 かおり)

★《新刊・近刊案内》★

■ *Fixed Expressions: Building language structure and social action* Ritva Laury, Tsuyoshi Ono (編) John Benjamins (95ユーロ+税)

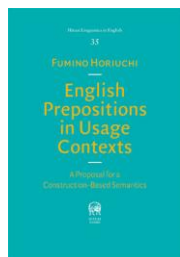
有限の語彙を無限のバリエーションで組み合わせることによって多様な文を生成できることが人間言語の特徴であるという見方は、従来の言語研究の中で一定の位置を占めてきた。それに対して、現実の言語使用において産出される発話はかなり程度の固定化されており、そういった定型表現こそ

が人間言語の構造体系における中核を構成しているという点に光を当てるのが本論文集の目論見である。本書を構成する各論文に共通するのは、第一に使用基盤 (usage-based) のアプローチ



である点、第二に相互行為 (interaction) における定型表現の働きに着目する点であり、英語や日本語をはじめ、中国語、エストニア語、フィンランド語など様々な言語を対象とした論考が並ぶ。日本語に関しては、大野剛氏と鈴木亮子氏による論文と遠藤智子氏と横森大輔氏による論文が掲載されている。なお、本論文集は、2014~2016年度にかけて鈴木氏が代表を務めた JSPS 二国間共同研究プロジェクトの研究成果の一つでもある(本書の著者のうち、Ritva Laury 氏、Sandra Thompson 氏、Hongyin Tao 氏は、鈴木氏らのグループが 2014 年より継続して開催している公開ワークショップにたびたび招聘参加しており、日本の学術コミュニティとの繋がりも深い)。その意味で、語用論分野における国際共同研究およびその成果発信の在り方として一つのロールモデルとして参照できる一冊とも言えるだろう。(2020.12.10 刊)

■ [『English Prepositions in Usage Contexts: A Proposal for a Construction-Based Semantics』](#) 堀内ふみ野 (著) ひつじ書房 (定価 9,400 円+税)



本書は、2017 年に慶應義塾大学に提出された博士論文を元にした研究書である。この本は英語の前置詞を題材にとり、前置詞の振る舞いが多様な文脈的要因によって説明されることを 5 つの事例研究から明らかにしている。本研究の特徴は、使用基盤モデル、構文文法モデルと親和性のある形で、コーパスの事例をベースにしてボトムアップの用法記述を展開している点にある。また後半の事例研究においては、対話統語論、会話の連鎖、幼児の言語発達段階など、従来の前置詞研究では見られない語用論的・学際的観点から、前置詞の振る舞いを説明している。本書で取り扱われている研究は、前置詞の用法記述に対して、認知的・社会的要因を総合的に検証する必要性を教えてくれる。また本書は、前置詞という個別研究領域を越えた、構文・会話・言語発達の相互作用を実証的に示す最先端の理論研究となっている。(2022.2.21 刊)

■ [『越境者との共存にむけて』](#) 村田和代 (編) ひつじ書房 (定価 4,200 円+税)

本書は日本社会における喫緊の課題である多文化共生について、ミクロアプローチからマクロアプローチまで、多種多様な方法を用いて多層的に考察する 1 冊である。本書は合計 10 章から成る。第 1 章から第 4 章まではミクロア



ローチとしてナラティブ分析などを用いながら、語りにも浮かび上がる社会的な諸問題を明確にしていく。第 5 章以降は言語政策や言語教育政策といったマクロアプローチとなっている。また、第 8 章では「越境」という言葉について様々なレベルで考察し、「排除」のメカニズムに迫っている。本書の特色として、2 章ほど英語の論文が含まれている。これには日本語の概要も付記されており、手に取りやすくなっている。全体を通して、今、揺らぐ社会の中で様々な形で行われる「越境」とそれにまつわる差別を含む多層な振る舞いが詳らかとなり、「共存」とはなんだろうか、と読み終わった後にため息がでる。読者には是非、何が起きているのか何ができるのか、考えながら読んでいただきたい。執筆: 岩田一成、大石尚子、岡本能里子、片岡邦好、木村護郎、クリストフ、村田和代、山口征孝、吉田悦子、Julian CHAPPLE、Magda BOLZONI、Astha TULADHAR (2022.02.28 刊)

■ [『敬語の文法と語用論』](#) 近藤泰弘・澤田淳 (編) 開拓社 (7,480 円 (税込))



敬語は、日本語という言語の重要な特徴の一つである。「中高時代の国語のテストでは苦労した」「大人になって改めて敬語の難しさに直面している」「他人の話す拙い敬語や過剰な敬語が気になってしまう」といった思いを持つ人も多いのではないだろうか。このように敬語は私たち日本語使用者の言語生活に切っても切り離せない存在である一方で、語用論研究の文脈で敬語にスポットライトが当てられる機会は必ずしも多くなかったように思われる。それに対し、「現代日本語における敬語は、もっぱら話し手と聞き手の間で行われる対話に用いられる形式である」と喝破する近藤氏の論考によって幕を開ける本論文集は、敬語現象について理解する上で語用論的な視点が不可欠であること、そして日本語を扱う語用論研究者にとって敬語は避けては通れないトピックであることを、読む者に鮮烈に訴えかけてくれる。合計 11 本の論考のアプローチは多岐に渡っているが、ダイクシスやポライトネスといった概念を用いた理論的考察、歴史的变化や方言差といった言語変異・言語変化へ

の着目、他言語（トルコ語、中国語、韓国語）と日本語との対照という類型論な視点、そして文化審議会国語分科会（旧国語審議会）による「敬語の指針」の背景と意義の考察など、いずれも語用論として言語と社会の関わりという観点から敬語現象を紐解くものであり、本学会会員にとって様々な角度から新たな学びと着想を与えてくれる一冊である。（2022.3.23 刊）

■『ダイクシス研究 (Lectures on Deixis)』 Charles J. Fillmore (著)、澤田淳 (訳) 開拓社 (定価 4,000 円＋税)



本書は、格文法、フレーム意味論、構文文法の創始者としても知られるチャールズ・フィルモアの著書、Lectures on Deixis の翻訳書である。フィルモアのダイクシス研究は、オースティン、サールの言語行為論、グライスの会話の推意、ブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論等と並び語用論の金字塔である。本書の構成は、第 1 回講義 MAY WE COME IN?、第 2 回講義 空間、第 3 回講義 時間、第 4 回講義 ダイクシス I—空間と時間のダイクシス—、第 5 回講義 COME と GO、第 6 回講義 ダイクシス II—談話と社会のダイクシス—となっている。本書の特筆すべき点は、詳細な訳注、そして 70 ページ以上にわたる巻末の訳者解説「ダイクシス研究の新展開」である。訳注では、読者の理解を補う具体事例が数多く掲載されている。訳者解説では、Fillmore 研究の先駆性を振り返ると共に、空間指示辞、聞き手の注意と指示詞の選択、調査票に基づく通言語的研究など、ダイクシスに関連する近年の研究成果が分かりやすく解説されている。（2022.4.20 刊）

■『外界と対峙する』伝康晴・前川喜久雄・坂井田瑠衣 (監修)、牧野遼作・砂川千穂・徳永弘子 (編) ひつじ書房 (定価 3,200 円＋税)

本書は「シリーズ言語・コミュニケーションの地平」の中の、『自己との対峙』、『他者との対峙』に続く第 3 巻である。本書でいうところの「外界」とは、コミュニケーションに参加していない人々やモノのことであり、それを文化人類学、ロボット工学、会話分析などから解明している。私たちが自分を取り巻く日常をそう捉えた時、「外界」とはモノに溢れかえり、それら

外界
と
対峙
する



と繋がりながら生きていることを実感する。冒頭では、Kendon の F 陣形システムを再考しており、一読してから他の章を読むことを薦めたい。また、「外界」の中には遠隔地を扱っているものもあり、コロナ禍における遠隔コミュニケーションの広がりや思い浮かべてもいいかもしれない。他にも、理容場面など私たちの日常の中にある場面を切り取り、それに解釈を与える作業が面白い。「自己との対峙」「他者との対峙」とともにぜひシリーズで読んでもらいたい一冊である。（2022.06.06 刊）

■『言語の標準化を考える 日中英独仏「対照言語史」の試み』高田博行・田中牧郎・堀田隆一 (編) 大修館書店 (2700 円＋税)



本書は複数の言語の形成史を対照する書である。第 1 部第 1 章では、本書の企画が始まった経緯や、メインテーマとなっている「標準化」について丁寧に説明されている。その後の第 2 章は、日中英独仏の 5 言語の歴史が概説され、読

者が第 2 部以降で学ぶための土台が作られる。第 2 部は計 9 章で構成され、5 言語の標準化について、各執筆者の研究が報告されている。5 言語の歴史を比較することができる本書は、非常に豊かな内容であり、読みごたえがあるが、中でも魅力的な特徴は、第 2 部で、執筆者に対し、別章の執筆者がコメントや疑問点を述べるスタイルとなっている点である。各章は、別言語について述べられているため、章を超えて言及し合う様子を読者が読むことができる仕掛けは、読者が異言語を比較することを助け、結果として執筆者間だけでなく、読者ともインタラクティブな関係を構築しているような感覚を得る。このユニークな構成を存分に楽しむことをお勧めしたい一冊である。（2022.5.13 刊）

■『一語から始める小さな日本語学』金澤裕之・山内博之 (編) ひつじ書房 (定価 2,600 円＋税)

本書は、17 名の執筆者が「日常のやりとりから」、「学生とのやりとりから」、「日本語学習者とのやりとりから」、「趣味の中から」、各々気になる一語の実質語に着目して行った「小さな日本語学」の論文集である。各論文がコーパスやアンケートに基づく最小限の論証によって短くわかりやすくまとめられており、新たに



文法研究や語彙研究に参画しようとする学生や若手研究者のための入門書として特にお勧めの一冊である。多くの研究で用いられる日本語コーパスについての基本情報や使い方も触れられており、コーパスの活用に興味を持つ人にとっても一読の価値がある。研究のネタ・素材に触れた時の着想を大切に、「ことばの楽しさ」を伝えようとする本書の内容にこそ、今後の日本語学の新たな展開へと結びつく大きなヒントが隠されているのかもしれない。そんな期待が持てる一冊となっている。(2022.8.30刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■ 秋の学会シーズンに向けて、対面にするのかオンラインにするのか、はたまたハイブリッドにするのか、各学会頭を悩ませていることとお察しします。人や地域によっても温度差があり、「腹の探り合い」をするようにマスクをつけたり外したり食事に誘ったり遠慮したり、という様子は、なんとなく東日本大震災後の放射能汚染を思い起こさせます。コミュニケーションの研究者としては面白い材料ですが、そんな気を遣わずに済む日が来ることを願うばかりです。(秦かおり)

■ 先日、コロナ禍で大学に入学した学生と、コロナ前の学生とは、コミュニケーションの在り方や関係性が異なると、学生たち自身が言っているのを耳にしました。とても興味深く思います。どのような状況であっても、研究のヒントがあることを改めて感じます。これから国内外の移動も復帰し、人々の交流はより盛んになると思います。新しい形のコミュニケーションを探求できれば、と願います。(野村佑子)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 48 号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2022 年 11 月 8 日

[広報委員会]

\* 委員長：秦かおり

\* Newsletter 編集担当：野村佑子

\* 公式ホームページ担当：

横森大輔・名塩征史

\* 会員メーリングリスト担当：

八木橋宏勇・木本幸憲

E-mail: webmaster-at-pragmatics.gr.jp